

モンゴルにおける持続的な防災啓発活動 —防災カルタ、市民主導の防災ワークショップ、映像コンテンツ

石井祥子¹⁾、奈良由美子²⁾、鈴木康弘³⁾、稲村哲也⁴⁾、
スヘー・バトトルガ⁵⁾、ビャンバジャブ・ナラマンダハ⁶⁾

Disaster awareness enlightenment project in Mongolia : playing cards for disaster preventing education, citizen-led disaster prevention workshop and video contents

Shoko ISHII, Yumiko NARA, Yasuhiro SUZUKI, Tetsuya INAMURA,
Sukhee BATTULGA and Byambajav NARMANDAHK

要 旨

筆者らは、2017年10月から、JICA草の根技術協力事業（パートナー型）「モンゴル・ホブド県における地球環境変動に伴う大規模自然災害への防災啓発プロジェクト」を実施してきた。当初計画では、2022年9月までの5年間を予定していたが、COVID-19感染症流行のため、それ以後は現地での実践活動が継続不可能となった。幸い、これまでの成果と今後の活動の可能性が認められ、約1年半をめぐりにプロジェクト延長が承認された。そこで、筆者らは、2022年8-10月にウランバートル市とホブド市を訪問し、約2年半ぶりに本格的に活動を再開することができた。本稿では、感染症流行により活動が制限された状況下における持続的な取り組みと、渡航が再開された2022年後半の活動をまとめる。主な内容は、防災カルタ大会の開催、市民を主体とする防災ワークショップの開催、そして映像コンテンツの制作と評価・活用についてである。

ABSTRACT

The authors have been implementing JICA Partnership Program, a *disaster awareness enlightenment project to create awareness about the large-scale natural disasters caused by the global environmental change in Khovd Aimag (Province), Mongolia*, since October 2017. The original plan was for the project to last for five years until September 2022, but due to the COVID-19 infectious disease outbreak, it became impossible to continue practical activities in the area after that time. Fortunately, the project extension was approved for approximately 18 months recognition of the results achieved to date and the potential for future activities. Therefore, the authors visited the Ulaanbaatar and Khovd from August to October 2022 and were able to resume full-scale activities. This paper summarizes the sustained efforts under the circumstances where activities were restricted due to the infectious disease outbreak and activities in the second half of 2022 when travel was resumed. The main topics are the organization of “Bosai carta” tournaments, the organization of citizen-led disaster prevention workshops, and the production, evaluation, and utilization of video contents.

¹⁾ 名古屋大学研究員（減災連携研究センター）

²⁾ 放送大学教授（「生活と福祉」コース）

³⁾ 名古屋大学教授（減災連携研究センター）

⁴⁾ 放送大学名誉教授

⁵⁾ モンゴル国立大学教授

⁶⁾ 研究協力者

1 はじめに

筆者らは、2017年10月から、JICA草の根技術協力事業（パートナー型）「モンゴル・ホブド県における地球環境変動に伴う大規模自然災害への防災啓発プロジェクト」を実施してきた。実施主体機関は名古屋大学（減災連携研究センター）であり、防災コンテンツの制作や防災ワークショップの実施などで、放送大学が連携協力している。モンゴル側カウンターパートの中心機関はホブド非常事態局とモンゴル国立大学である。

当初計画では、2022年9月までの5年間で予定していたが、2020年から拡大したCOVID-19感染症流行（以後「パンデミック」と言う）のため、それ以後は現地での実践活動が継続不可能となった。地域住民との信頼関係ができプロジェクトが順調に進捗してきた矢先での中断は耐え難く、延長を申請したところ、これまでの成果と今後の活動の可能性が認められ、約1年半をめどにプロジェクト延長が承認された。そこで、筆者らは、2022年8-9月に現地ホブド市を訪問し、約2年半ぶりに本格的に活動を再開することができた。

一方、渡航制限期間中も、筆者らは現地の協力者らとオンラインでの打ち合わせ・会議を行い、可能な活動を継続的に継続してきた。その一つは、2019年度まで現地でバグ（地区）長、ソーシャルワーカーらと共に基礎固めに務めてきた市民主体の防災ワークショップである。また、モンゴル国立大学の付属スタジオのスタッフとの共同による映像コンテンツ制作についても、可能な編集作業を一部継続してきた。

もう一つの重要な活動が防災カルタの競技大会の開催である。2018年にホブドで開始した防災カルタ作成は、2020年6月において完成した。まずはホブドの子ども達に絵と詩を作成してもらい、コンテストを実施し、優秀作をベースに55枚の絵札と詩の札（読み札）を完成させた。2020年初頭から渡航ができなくなったが、モンゴル非常事態庁とナラマンダハが協働してウランバートルで印刷し、多くの手作業を経て完成に至った。ここまでの詳細な経緯は本誌既報（石井ほか2020、2021が報じている）。

本稿では、パンデミックにより活動が制限された状況下における持続的な取り組みと、渡航が再開された2022年後半の活動をまとめる。主な内容は、防災カルタ大会の開催（①2022年2月のウランバートルの小学校における防災カルタの効果を見るための試験的な取り組み、②2022年5月に日本とオンラインで結んで実施されたホブド・ツァストアルタイ学校における試行

的カルタ大会、③2022年9月の日本モンゴル交流50周年記念ホブド・カルタ大会、④その後の全国展開に向けた動き）、次いで、市民を主体とする防災ワークショップの開催（2022年5月16日及び6月6日のオンラインによる実施、及び2022年9月6日の対面による実施）、そして映像コンテンツの制作と評価・活用についてである。

2 「モンゴル防災啓発プロジェクト」の背景と経緯

このプロジェクトの背景には、モンゴルの事情として二つの側面（自然と社会）がある。一つは、自然環境の変化に関するものである。地球温暖化の影響は寒冷地モンゴルにおいて様々な形で現れている。高山の水河後退、永久凍土縮小に加え、融雪期における洪水が山麓地帯に住む遊牧民に被害を与えている。また夏季の干ばつとその後の冬季のゾド（寒害）も深刻化している。さらにモンゴルは多くの活断層を抱え、大規模地震の発生も懸念される。もう一つの側面は、ここ30年のモンゴル社会の大きな変化である。モンゴルは、ロシア（赤軍）の支援を得て1921年に清朝からの実質的な独立を達成し、それ以後、社会主義の道をたどった。その間、遊牧社会は、組合（ネグデル）化が進められながらも、ゲル（移動式家屋）に居住して季節移動する遊牧システムの「伝統」は維持されてきた。しかし、東西冷戦の終焉・ソビエト連邦解体の流れの中で、モンゴルでは1990年から体制を変革し、民主化・市場経済化が進められた。それに伴い、遊牧社会から都市部への人口移動、首都ウランバートルへの人口集中が急激に進み、都市部では特に新たな災害リスクが高まってきた。地方においても、従来の遊牧文化は独特の高い災害対応能力（レジリエンス）を有していたが、定住化と市場経済化による社会環境・生活様式の変容によって災害リスクが増大している⁷⁾。その一例はゾド（寒害）であり、本プロジェクトにも参加するモンゴル非常事態庁のチャドラーバル・アリウナ氏が近年の状況を取り纏めている（Ariunaa et al. 2020, 2022）。

このように、モンゴル社会には、従来の経験に基づく防災意識だけでは対応できない状況があり、気象災害や地震災害に関して科学的でより正確な情報と知識の普及が急務となっている。モンゴル非常事態庁も国際的な防災計画に積極的に参画し、そうした問題意識を強く持っている。

筆者らは、1990年代からモンゴルで、文化人類学（稲村、石井、バトトルガ）⁸⁾ や活断層・自然災害（鈴木）⁹⁾ などの研究活動を行い、それを基礎に、2016年、

⁷⁾ 1990年以降、急激な市場経済化・近代化が進んだが、経済、教育、情報などあらゆる面で中央と地方の格差が広がっている。地方の遊牧社会では、社会主義時代には国家や組合によってシステム化されていた災害対策がなくなり、ゾド等の自然災害に対する脆弱性が拡大している。

⁸⁾ モンゴルの文化人類学的研究については、石井・鈴木・稲村（編）2015、稲村ほか2017、稲村2014、バトトルガ2003、2004、2008など。

モンゴルと日本とが共同して災害レジリエンスについて研究する「レジリエンス研究センター」をモンゴル国立大学内に設置した¹⁰⁾ (稲村ほか2017)。モンゴルのレジリエンスの維持強化のためには、現地の風土や民族固有の文化・慣習を活かすことも必要があり、そのような理念の基にモンゴル人と日本人とが共同して学びあい、研究を進めると共に、人材育成もめざして設立したものである¹¹⁾ (Suzuki et al. 2019)。

一方、放送大学では、奈良と稲村が主任講師となりTV科目「レジリエンスの諸相—人類史的視点からの挑戦'18」を制作すると共に、レジリエンスに関する研究を進めてきた (稲村ほか2017、奈良・稲村 (編) 2018、Nara & Inamura (eds.) 2020など)。また、モンゴルにおける遠隔教育の推進がレジリエンスの維持強化に資するものであると考え、「遊牧地域における遠隔教育の研究と実践」等をテーマに、科研費・挑戦的研究 (萌芽および開拓) も推進してきた¹²⁾。

以上のような経験と基盤に基づいて、企画し、推進してきたのがJICA草の根技術協力事業である。その中心的な対象地域としたのがホブド県であった (図1)。そこは、モンゴル西部のアルタイ山脈を擁する地域であり、多民族が居住する県である。環境と文化が最も多様であり、災害リスクも高い地域であることが、選別の主な理由である。モンゴル非常事態庁の地方支部の拠点の一つであることも条件の一つであった。

筆者らは、現地協力者と共に度々ホブド県を訪れ、非常事態庁、現地の行政、ソーシャルワーカーやボランティアと共に、防災啓発に関する実践活動を実施してきた。本プロジェクトの2019年度半ばまでの実践に



図1 モンゴルとホブド県の位置

については本誌既報で報告してきた (石井ほか2019、石井ほか2020、石井ほか2021、稲村ほか2018、奈良ほか2020)。そこで、本稿では、それ以後の活動 (2022年前半までのオンラインによる活動、および2022年8-9月の現地での活動)、また映像コンテンツ制作について報告し、それらの活動の意義、評価と展望について論じたい。

3 モンゴルにおける防災カルタの展開—2021~2022年

3-1 ウランバートルのナラン小学校におけるカルタ大会 (2022年2月21~25日)

(1) 開催までの準備

2020年以降、新型コロナウイルスによる感染症拡大によりモンゴルでもロックダウン状態となり防災カルタ活動も中断を余儀なくされた。2020年1月末にモンゴル非常事態庁 (NEMA) においてバドラル長官出席の下開催された、活動報告と今後の展開を議論するためのワークショップがコロナ前の日本・モンゴル協働活動の最後となった。4月にカルタの原稿完成後、専らモンゴル側のみでの活動として進められ、5月にウランバートルで印刷、6月に箱詰めされ、6月26日に非常事態庁へ納品された。これを受け、バドラル長官は今後の普及に向けた命令書を発令し、非常事態庁内に、ガンゾリグ副長官のほか、幹部のアリウナ氏、セルジミヤダグ氏らによるカルタ普及チームが結成された。その後、カルタ普及チームの管理役として指名されていたアリウンボヤン筆頭副長官が新たな長官に就任した。

一方、石井祥子とナラマンダハが中心となって、コロナ対策に関するカード6枚【巻末写真1】を新たに作成した。2020年にウランバートルで印刷したカルタははがきサイズであったが、新たに追加して作成したカルタは日本の百人一首サイズにして、日本で500セット印刷した。2022年2月、ナラマンダハの発案で、ウランバートル市内のナラン学校でカルタ大会の実施が試みられた。詳細は以下の通りである。

(2) 実施までの経緯

モンゴルにおいて、コロナ感染者数が減少し政府の

⁹⁾ 鈴木は、科研費・基盤研究 (B) 海外学術調査「ウランバートルの地震ハザード—活断層認定問題と1967年モゴド地震の再評価—」(2016~2018年度、代表鈴木康弘)、科研費・挑戦的研究 (萌芽)「急成長モンゴルにおけるハザードとレジリエンスの評価と地域計画に関する国際共同研究」(2016~2018年度、代表鈴木康弘)等により、モンゴル非常事態庁等と共同して、活断層、自然災害等に関する研究を推進した (Suzuki et al. 2020)。

¹⁰⁾ 日本学術振興会二国間共同事業「社会レジリエンスの構築に資する日本・モンゴルの国際共同研究」(2016~2018年度、代表鈴木康弘)等による。

¹¹⁾ 人材育成の一例として、名古屋大学のASC (アジア・サテライトキャンパス) の博士課程に進学したモンゴル非常事態庁幹部のアリウナ氏が2022年に博士学位を取得した。

¹²⁾ 科研・挑戦的 (萌芽)「山岳高所・遊牧地域における遠隔教育の可能性」(2018~2019年度、代表稲村哲也)、および科研・挑戦的 (開拓)「遊牧・山岳・先住民地域におけるリモート教育のモデル構築に関する実践的研究」(2021~2026年度、代表稲村哲也)による。遊牧民が移動生活を続けながら高等教育を受けられる遠隔教育システムを構築することが最終目標である。それによって、高度にレジリエントな生活システムである遊牧を維持し、地方の中央の教育格差軽減、都市への人口集中軽減、地方の活性化に資すると考えられる。

規制も緩和された2022年2月下旬に、ナラマンダハ（現地協力者）が中心となり、ウランバートルの私立ナラン学校と相談してカルタ大会の実施を実現した。

ナラン学校は、1年生～12年生（日本の小学校1年生～高校3年生に相当）を擁し、日本語を第2外国語として教えている学校である。ナラマンダハがツェツェグジャガル校長にカルタを紹介すると、強く関心を持たれ、小学4年生を対象に、A組、B組、B組の3クラスでカルタ大会を実施することになった。

(3) 当日の様子

4年A組は2月21日、B組は2月23日、B組は2月25日の放課後（ウランバートル時間で午後2時から）、カルタ大会が開催され、日本とオンラインで繋いだ【写真1】。各教室において、1回戦で5つのテーブルで競技し、各テーブルからの勝者5人による2回戦を実施し、優勝者を決定した。A組はアマルボルド君、B組はオドエルデニ君、B組はトルガ君が優勝した。それを契機に、彼らは防災担当となり、クラスでカルタを遊んだり、下級生たちにカルタ遊びを教えたりすることになった。

2月21日のカルタ大会の様子は、モンゴル非常事態庁（NEMA）の広報カメラマンが撮影した。翌日の19:00には、NEMAが作成したニュースが全国放送され、カルタだけでなく、本プロジェクトの全活動が紹介された。その放送を視聴した保護者たちから、「とても効果的なプロジェクトをモンゴルで実施していて、その活動に我が子を参加させてくれてありがとうございます」「教育的な面でとても興味深い遊びです。プロジェクトの成功を祈ります。」などの好意的な反応が寄せられ、ナラマンダハの元に「カルタを買いたい」と複数の問い合わせがあった。

(4) 子ども達の感想

子ども達から寄せられた、カルタ大会の感想は以下の通りであった。



写真1 ナラン学校4年A組で行われたオンライン・カルタ大会の様子

- 1) 防災カルタで遊んで、自然災害が起きたときに何をすればいいか学びました。例えば、火事があったら101番に早く電話する、地震があったら机の下に入る、などです。友達よ、災害や事故などから自分を守りましょう（4年A組）
- 2) この遊びは、勝つのが大事なのではなく楽しむのが大事だと思いました。それに、知識を得ました。友達からもいろいろと習いました。友達と一緒にグループで遊ぶのは楽しかったです（4年A組）
- 3) 防災カルタで遊んでとても面白かったです。ホブド県の子ども達を作ったと聞いて驚きました。私たちは、防災カルタで遊んで、安全に暮らすために何をすべきかわかりました。（4年B組）
- 4) 防災カルタで遊んで、たくさんのルールを理解しました。我慢強くすること、注意深くすることが大事だとわかりました。また、譲り合うことと正直であることが大事だとわかりました。（4年B組）
- 5) 防災カルタは日本の遊びで、とても楽しい遊びです。防災カルタで遊んで、将来生活に役立つことをたくさん知りました。私は今、家で防災カルタを自分で作っています。作り終わったら、家で家族と遊びたいと思います。防災カルタの詩はとても素敵でした。驚いたのは、子ども達を作ったということです。（4年B組）
- 6) とても楽しかったです。自分を守る知識を教えてくれる遊びがあるとわかりました。カルタで遊んで、友達ともっと親しくなりました。家族とも遊びたいです。（4年B組）
- 7) 私は、火事や嵐などについて知って怖かったです。すべきことをちゃんとやると自分に約束しました。面白かったです。（4年B組）

このほか、「ことわざをたくさん知ることができました」という感想もあり、われわれが意図した「詩の中にことわざや故事、モンゴルの伝統を盛り込む」ことの効果が確かめられた。

(5) 報道

2/25のカルタ大会には朝日新聞社の木村俊介記者が参加した。また、同日、中京テレビのホンゴロゾル氏もカルタのモンゴルでの展開に興味を持ち、参加した。木村氏の取材内容は、2022年4月1日に朝日新聞中部版朝刊に掲載された。

また、先述のようにNEMAのテレビ番組で、これまでの本プロジェクトの活動および今回のオンラインカルタ大会の様子が全国放送で紹介された。その番組の動画は、非常事態庁のwebsiteでも掲載された。
<https://nema.gov.mn/n/124360?fbclid=IwAR3IxT4Nv0LCohoU6L2yE8khzqEP3wXqy6pSYxgGJFRwrd2j7p5rDmnkxTQ>

なお、中部JICAやモンゴルJICAにも、カルタ大会への視聴参加、Facebookでの情報発信の協力を得た。

また、JICAモンゴルは、モンゴル・日本国交樹立50周年の記念として、カルタの増刷を決定した。

3-2 ホブド・ツラストアルタイ学校における試験的なカルタ大会

(1) 準備過程

2022年4月にバトトルガがホブド市のツラストアルタイ学校を訪問し、アルタンルハグワ校長、エルデニチュルーン美術担当教諭、ジャブザンドラム外国語教諭、バトオルシホ・ソーシャルワーカーと相談を行った。4月6日にはオンラインで日本とつなぎ、石井、鈴木とミーティングを実施した。そして5月11日に日本とオンラインで結びながら、ツラストアルタイ学校でカルタ大会を試験的に実施することを決定した【写真2】。

大会までの期間、現地の学校とNEMAやホブド非常事態局、ナラマンダハ、石井はオンラインで大会の運営について話し合い、カルタ大会の準備を進めた。

ツラストアルタイ学校では、大会に備えて4月末に5～7年生（日本の小学5年生～中学1年生）200人の生徒を集めてプレ・防災カルタ大会を実施し、大会に出場する生徒を選抜した。その際、学校に配布された2部のカルタでは足りなかったため、学校の先生方がカラーコピーしてラミネートでカバーをし、カルタの部数を増やすなどの努力をしてくれた。

カルタ大会の2日前には、ツラストアルタイ学校からホブド市内の公立学校にカルタ大会参加の案内状を送り、各学校から参加する人数、参加者は服装を揃えること、チームに名前を付けること、等の指示がなされた。カルタは本来、個人競技であるが、この試験的なカルタ大会ではチームで参加し、メンバー全員の獲得した枚数で順位を付けることになった。また、大会当日は上級生が手伝いをするようになった。この上級生たちは、2019年のカルタ作成コンテストにクラス全員で参加し、1位になったクラスの生徒たちであった。大会前日には、通信状況の最終チェックを実施した。

(2) 当日の様子、反響・報道

5月11日、ホブド時間15:00からカルタ大会が開始した。日本側プロジェクトメンバーはオンラインで参加した【写真3】。

ホブド県ジャルガラント・ソムの7つの公立学校の10チーム（第1番学校2チーム、第2番学校1チーム、第3番学校1チーム、ツラストアルタイ学校3チーム、第6番学校1チーム、プログレス学校1チーム、第7番学校1チーム）の、合計10チーム40名が参加した。大会は、ツラストアルタイ学校のアルタンルハグワ校長とホブド非常事態局ネルグイ副所長の挨拶から始まり、防災カルタができるまでの写真をPowerPointで示しながら、石井とナラマンダハが生徒たちに説明をした。

第1回戦は、2チームが対抗する形で、5つのテーブルで行われた。生徒たちの真剣さは、オンラインの画面越しでも伝わってきた。

1回戦で勝った5チームは2回戦に進んで決戦し、最終的に3チームが3回戦に進んだ。3回戦はカルタ取りで順位を決めるのではなく、全カードから各チームが絵札と読み札をそれぞれ1枚ずつ取って、それに合わせて新たに絵や詩を作り、順位を付けるという先生のアイデアで実行された。審査員は先述の、大会の手伝いをしてきた上級生たちが行った。その結果、優勝したのは第3番学校の「LUCKY FRIENDS」チーム、準優勝は第1番学校の「子どもレスキュー」チーム、3位は第1番学校「緑の革新」チーム、特別賞はツラストアルタイ学校の「アルタイの虎」チームであった。

大会は大盛況で、ホブドのテレビ局により取材・放送され、国家非常事態庁のwebsiteでも紹介された。

https://nema.gov.mn/n/127152?fbclid=IwAR0vubx0mwap2OMAd_GT-V113TEhPgiwO2DWDP550DcKEimzWgXhdvbukU



写真2 ホブドと日本をオンラインで行われたカルタ大会。左側は大会開催に尽力されたエルデニチュルーン先生



写真3 ホブドオンライン・カルタ大会に参加した生徒たち、ツラストアルタイ学校の先生方、ホブド非常事態局ネルグイ副所長

(3) 子ども達の感想

カルタ大会終了後、参加者から感想が集まった。以下に紹介したい。

- 1) 防災カルタ大会はとても楽しかったです。防災カルタで遊んでいろいろなことが分かりました。弟と妹たちに教えてあげたいと思います。こんな大会を行ってくれた方々みんなありがとうございます。これからも大会に出てもっといろいろな学んでいきたいと思います。(ツァストアルタイ学校 7年V組)
 - 2) 防災カルタ大会は私にとって良い思い出になりました。大会の最後に皆さんとオンラインであいさつしたときとても言葉で表せないぐらい良い気持ちでした。8月に皆さんと会うまで日本語を勉強しておきたいと思います。8月のカルタ大会に先生たちを参加させないで子ども達だけで遊びたいです。そうすれば子ども達の本気が出ると思います。(ツァストアルタイ学校 9年B組)
 - 3) 防災カルタ大会はとても楽しかったです。たくさん遊んで、たくさん笑いました。防災カルタは本当に楽しい遊びです。2019年にクラスの友達みんなでカルタをつくるコンクールに優勝しました。今回クラスメートみんなで監督と審査をしました。うれしいです。(ツァストアルタイ学校 9年B組)
 - 4) (「カルタができるまで」の紹介の中で) 私の小さい時の写真が大きな画面で映った時本当になつかしかったです。このカルタでモンゴルの子ども達が遊べるようになってとても感謝しています。感動しています。防災カルタで遊んで、事故・災害を予防するたくさんを学びました。(ツァストアルタイ学校 D.アマルバヤスガラン)
 - 5) 防災カルタ大会は本当にCOOL、またFUNNY、面白かったです。また遊びたいです。大会は言葉で言えない、ペンで書けないほど良かったです。(ツァストアルタイ学校)
 - 6) 初めて防災カルタ大会に出てうれしかった上に緊張もしました。1回戦で対戦したのは第6番学校の7年E組のチームでした。非常に強いライバルだったので緊張して体が自由に動きませんでした。カルタ大会で遊べるようになるのに一番手伝ってくれたのは2人の先生と同じチームのメンバーたちでした。防災カルタで遊んだときに色々問題がありました。でもわがチームはみんなで協力して勝ったことをうれしく思っています。他の子ども達に言いたいことは「防災カルタで遊ぶときちゃんとルールを守って、安全に遊んでください」です。この防災カルタをもっと多くの子どもに知らせて、数多くの子どもが遊んでほしいです。(第1番学校「緑革新」チーム長)
 - 7) 防災カルタ大会に友達と参加してチームで2位になりました。この大会に出て勝ち負けが大事ではなくて、防災カルタで学んだ知識を実際に生活に使えるようになることが大事だと思います。モンゴル全
- 国でカルタ大会をやればみんな喜ぶと信じています。皆さんがモンゴルに来た時、こんな良い遊びを作ってくれたことへの感謝の気持ちを自分の口で言いたいです。皆さんにこれからの仕事の成功を祈ります。(第1番学校)
 - 8) 学校を代表して防災カルタ大会に出て2位になったことはとてもうれしいことでした。この大会に出ていろいろなことを学びました。大会に出ることになったのを聞いて驚きました。できるかなと思って迷いました。でもチームのみんなはとても自信を持っていました。みんなを見て勇気が出ました。今回の大会にわが学校を代表して2チームが参加しました。2チームとも表彰されたことをうれしく思います。私たちはたくさん練習しました。時間があるたびにカルタで遊んで練習し、努力したおかげで2チームとも表彰されました。また防災カルタ大会に参加したいです。私たちの2人の先生は私たちを一生懸命に練習させてくれました。感謝しています。私は今回の大会に出られてうれしかったので、次の大会にクラスの友達にも参加してほしいです。一緒に遊びたいです。最初は緊張しましたがでも少しずつ落ち着いてきました。先生たち、応援してくれたみなさん、ありがとうございます。(第1番学校 6年E組)
 - 9) 私はトゥグスツォグトといいます。第1番学校7年B組の生徒です。今回の大会に出て楽しかったです。知識、スピード、才覚で競争して遊びました。とても面白かったです。しかし私は一人の子どもの手を気づかないで打って、その子の手から血が出てしまいました。日本の皆さんモンゴルでこんな楽しい大会を開いてありがとうございます。日本の皆さんは会場に来ていたらもっと楽しい少しでも日本語の言葉を教えてくれると思います。(第3回戦の決勝で) 子ども達が審査したのは気に入りませんでした。(第1番学校)
 - 10) 防災カルタ大会に出てとてもうれしかったです。大会に出て防災カルタで遊んだおかげで、テレビ、インターネットで予報されていない災害がおこったら何をすべきか学びました。命を守る知識を防災カルタで学びました。すべての子どもとすべての大人に防災カルタで遊んでほしいです。(第1番学校 7年B組)
 - 11) 大会に出たとき多くの日本人を画面で見ました。日本人はカルタがどうやってできたか話してくれました。数多くの方が努力を込めて作ったカルタでした。とても面白い遊びです。遊んでいるとき周りから監督と審査の人たちが正しく遊んでいるかを監視していたので緊張しました。相手チームの子ども達は活発で元気な子たちでした。1回戦で勝つてすぐうれしかったです。この楽しい遊びを作ったお姉さん、お兄さんたちに感謝しています。災害をどう予防するか、自分の身をどう守るべきかなどはカルタに書いてあったので覚えました。私は友達、他の

子ども達に学んだことを話してあげたいと思います。(第1番学校 7年B組)

- 12) 防災カルタ大会に出て7つの学校の中で優勝したことはうれしいです。一番楽しくて面白かったのは絵をかいたり詩を作ったりしたことです。各学校でこのような大会が行われもっと多くの子どもが参加できたらいいなと思います。この大会を開いた皆さんありがとうございました。(第3番学校 7年B組)

3-3 日本モンゴル交流50周年記念ホブド・カルタ大会 (1) 当日までの経緯

2022年8月上旬、日本からの海外渡航がようやく可能になり、鈴木・石井・奈良が1年半ぶりでウランバートルを訪問した。そしてバトトルガ、ナラマンダハと3日間打ち合わせを実施し、9月5日にホブドでカルタ大会を実施することを決定した。

2022年8月末、鈴木・石井・奈良・稲村が、カルタ大会とワークショップを実施するため、再びモンゴルを訪問した。

2022年は日本とモンゴルの外交樹立50周年に当たるため、JICAモンゴル事務所が50周年ロゴを入れた改訂版を6月までに500セットを増刷していた。そのうち300セットをホブドへ届け、ホブド県内での普及を一気に進めることとした。この時点ではまだJICA内部の取り決めとしてホブドへの移動は制限されていたが、8月30日に移動の承認が下り、9月4日にウランバートルからプロジェクトチームメンバー（鈴木、石井、稲村、奈良、バトトルガ、ナラマンダハ、ナランゲレル）が空路ホブドへ入った。JICAモンゴル事務所からも吉村徳二副所長のほか、武田敦岐氏、オユンツェツェグ氏が同行した。

(2) 当日の様子

大会当日の朝は、会場の下見を行った。体育館へ入るとまず、モンゴル・日本友好関係50周年を祝う言葉が日本語・モンゴル語両方の言語で壁に飾られ気分が高揚した。その他、体育館の壁には、参加した7つの学校の子も達が描いたモンゴル・日本友好ポスターなども我々を迎えてくれた。すっかり感激していると、「これらはモンゴル人から日本人へのサプライズですよ」と、大会準備を中心的に行ってくれたエルデニチュルーン先生から伝えられた。

14:00に大会が開始すると、さらにサプライズが待っていた。子ども達が伝統舞踊を披露してくれ、さらに馬頭琴演奏に合わせてモンゴル・アクロバットで大会を盛り上げてくれた【写真4】。カルタ大会には、ホブド市内7つの公立学校から14~15人ずつの生徒（中学1~3年生）が教員に引率されて、100名が参加した。第1回戦は10のチームに分かれ、体育館に敷かれた絨毯上で競った【巻末写真2】。「勝負にこだわるのは西部地域の特徴」とホブドの先生が語るように、カルタゲームは白熱した【写真5】。2回戦は10チー

ムからそれぞれ1位が進出し、1~4位（4位は2名）が選ばれ表彰された【写真6】。

この大会ではJICAモンゴルが印刷したカルタ300個をホブドNEMA・ホブド県全ソム・ツァストアルタイ学校等へ贈呈した。この増刷された防災カルタには、モンゴル日本国交関係樹立50周年のロゴが入られた。また、2019年にカルタ作りに参加し、絵や詩がカルタに採用された子どもにも50周年のロゴ入りカルタを贈呈した【写真7】。カルタ大会に参加した100名



写真4 ホブドで9月5日に実施されたカルタ大会の前座で披露されたモンゴル伝統舞踊



写真5 カルタゲームに熱中するホブドの子ども達。



写真6 カルタ大会表彰式の様子。ホブド非常事態局ネルグイ副長官から表彰状が渡された。

の他、カルタ大会の手伝いをしてくれた上級生やカルタを贈呈された子ども達を加えると、ホブド市の子ども総勢150人を集めて行ったホブド初の対面でのカルタ大会は、大成功だった【写真8】。



写真7 2019年にカルタ作成コンテストに参加し絵や詩が採用された生徒へのカルタ贈呈



写真8 大盛況だったホブドカルタ大会

(3) カルタの教育効果、反響・報道

カルタの教育効果について、ツァストアルタイ学校エルデニチュルーン先生は次のように評価した。

「子ども達は楽しく遊んだし、防災に関する知識を学んだのは何より大事でした。防災カルタで遊ぶことによって子ども達は防災知識を学んだ上に、子ども達の暗記力、理解力、分析力などの能力も高めることができましたと感じられます。幸いなことにホブド県で子どもが被害を受けるような大きな災害がまだありません。だから子ども達がカルタで学んだ知識を生かして命が助かったというような事例はまだありませんが日常生活には役に立っていると思います。手をちゃんと洗うなどの習慣を身に付けていると思います。子ども達はカルタで学んだことを家に帰って家族のみんなによく話すようになったと聞きました。教室でカルタ遊びをしたいと言う子どもも多くなりました。防災カルタにない他の災害についてカルタを作りたいという子

どもも出てきました。ですからツァストアルタイ学校は第3コマ目の休憩時間に各クラスでカルタをすることを決定しました。」

対面によるホブド初の防災カルタ大会は、ホブドのテレビ局により取材・放送され、ホブド非常事態局やJICAモンゴルのFacebook、JICA広報部のFacebookやtwitterでも紹介された。

<https://www.facebook.com/jicapr/posts/pfbid0uc9GF2DRQW3kii4wtosKijMpTZMteoZFDaDN3X9cWizusgx2FmKmE3Kj89NqhLK5l>

3-4 防災カルタの全国展開に向けた動き

モンゴル非常事態庁（NEMA）は、子どもを対象として防災教育にとって、防災カルタが極めて有効であるとの認識をもち、将来的な防災カルタの普及を計画した。そこで、10月6日に鈴木と石井がモンゴルを再訪し、NEMAアリウンボヤン長官、アリウナ国際連携室長、アナンダ同室員、ハドバートル防災教育室長らと会合をもった【写真9】。

会合ではまず、これまで5年間のプロジェクト成果として、①防災が日本とモンゴルの強力な連携の下に防災カルタが完成したこと、②ハザードマップ作成が地理学研究所のナランゲレル氏との協働により開始し、市民ワークショップをきっかけにホブド市の防災担当者との連携も始まったこと、③地球温暖化の影響も考慮した自然災害と防災の知識普及のための放送コンテンツの整備が進んでいることを確認した。そしてこのプロジェクトがコロナによる中断を考慮してあと1年半延長されるため、さらなる活動へと発展させることを確認した。アリウンボヤン長官からはそれぞれの活動に対して、これまでの到達点を評価するとともに、今後への期待が語られた。

この日の会合では、ホブドに特化した防災カルタを今後どのように全国展開させるべきかが話し合われた。教育省との連携をどのように進めるかも課題であ



写真9 カルタの今後の展開についての会合（左からアナンダ国際連携室員、アリウナ国際連携室長、アリウンボヤン長官、鈴木、石井、ハドバートル防災教育室長）

った。プロジェクトチームの案としては、まずはウランバートル版を作る必要性を提示した。

非常事態庁からも、ホブドとは大きく環境の異なる都会においては、①ビル火災、②都市における地震対策、③激しい水流を伴う洪水対策、④ビル内における子どもの安全確保などに大きな課題があることが表明された。また防災カルタによる防災啓発の重要な点として、ホブドで実施してきたような子どもの参加型を進めることが強調された。防災は知識を与えるだけでは実現できず、我がこととして考えることが最重要である。この点は日本とモンゴル両国でそれぞれ防災に携わるものとして合意するところであり、このプロセスを省略するわけにはいかない点を相互に確認した。

4 市民ワークショップの継続と展開— 当事者主体の本格化

4-1 これまでの経緯

本プロジェクトは参与観察やコミュニティ・ベースドのアクションリサーチなど、徹底したフィールドでの活動を核としながら進められてきた。市民ワークショップもしかりである。本プロジェクトではこれまでも数回現地において市民、バグ長、ソーシャルワーカーを参加者とした防災ワークショップを開催してきた（奈良・バトトルガほか2020¹³⁾。しかし今般のCOVID-19パンデミックのもと、渡航が制限され、現地でのワークショップを催すことができなくなった。日本人チームが現地に行けないことによるプロジェクト活動の中断や遅れが懸念された。しかし、本パートの小括を先取りして述べると、それは杞憂であった。むしろ、この間に現地における当事者が主体性を増し、地域防災への取り組みは着実に前に進んだ。この前進を可能にしたのは、オンライン会議システムの活用と、日本・モンゴルにおける「安全・安心な地域・暮らしをつくりたい」という目的の共有と、草の根プロジェクトの活動を通じて着実に積み上げてきた相互信頼の存在であった。

前報（石井・奈良ほか2021）以降に取り組まれてきた市民ワークショップについて、以下にその内容を述べる。この間、大きくは3回（オンラインによる開催2回、現地でのリアル開催1回）のワークショップが実施された。

4-2 オンラインによるワークショップ1（2022年5月16日開催）

同ワークショップは現地と日本側とがオンラインにより開催したものである。モンゴル側の主要な参加者はホブド市（ジャルガラント・ソム）の12あるバグ（地区）のそれぞれのバグ長とソーシャルワーカーで、彼らはホブド市庁舎の会議室に集まった。プロジェクトからはバトトルガがホブド市庁を訪れワークショッ

プに加わった。日本側からはプロジェクトメンバー（奈良、稲村、鈴木、石井）のほかJICA中部・内藤陽子氏が参加した。

同日のワークショップの目的はモンゴル側から以下の通り提示された。

- ①安全・安心な地域とくらしを実現するにあたり、当面の課題として今年の夏の生活リスクに焦点を絞りたい。リスクの対象は子どもを中心とし、どのようなリスクがあるのかを議論する。
- ②洗い出したリスクについて、どのように対策すべきかを議論する。
- ③プロジェクトメンバーとのディスカッションを行い、具体的な行動枠組を作るためのがかりを得る。

ワークショップでは、ファシリテーターを奈良とバトトルガおよびバトエルデネ（ホブド市ビチグトバグ長）がつとめ、上述のアジェンダに沿いながらグループに分かれてワークを行った。ワークを通じて次のような意見が出された。

- ①については、川の増水に飲み込まれて溺れるリスク、無秩序に張り巡らされた電線に触り感電するリスク、トイレ用に掘った穴に落ちるリスク、汚染された水を飲んでしまうリスク、工事現場等で遊んでけがをするリスク、親に放置されるリスク、食中毒のリスクなど、この夏に子ども達が被る可能性のあるリスクが整理された。
- ②については、子ども自身がリスクや対策を学べる会を開く、SNSでリスク情報を発信する、電線に関するルールを策定する、子どもの遊び場を点検する、地域内での人々や関連機関の連携を強化する、短期間の託児所を開設する、互いに気を配る関係や環境を作る、といった意見が出された。
- ③の全体のディスカッションでは、子どもを中心にした課題設定の意義が共有された。すなわち、1) 子どもを守ることはリスク弱者を守ることに同義であり、これはあらゆる人を守ることにつながる。「子どもを守る」ことは地域において共有されやすい価値であり、子どもへのアプローチが大人にも波及することが期待される。2) 生活上のリスクを扱うことについても、小さいリスクの管理を普段から行うことは、地震など大きなリスクの管理する地域の力が高まることから、やはり意義がある。そのほか、3) 子ども向けの学習会は是非開催すべきであること、4) 地域への愛着と信頼を高めるためにも地域ぐるみでのリスクに取り組みを可視化すべきであること、5) 活動をその都度評価して次の課題解決につなげること（PDCAを回すこと）、6) 情報発信はSNSやポス

¹³⁾ アンケート調査による住民の防災意識等に関する分析については、Nara and Battulga2019a, 2019b、奈良・バトトルガ2020。

ター・看板など多様なメディアを活用すべきこと、7) リスク対策を恒常化するためにも予算をつけ組織的に行うべきこと、などが確認された。

ワークショップのまとめとして、今日の議論内容は行政にも共有したうえで、この夏の子どもにとっての生活リスクを低減するための具体的な取り組み（イベント等）を近日中に実施すること、その結果を次回のワークショップで報告することとなった。

4-3 オンラインによるワークショップ2（2022年6月6日開催）

オンラインによる2回目のワークショップとなる同会には、モンゴルからはホブド市（ジャルガラント・ソム）の12のバグのバグ長とソーシャルワーカー、議会秘書らがホブド市庁舎の会議室から参加した。バートルガはこの日はオンラインによる参加となった。日本側からはプロジェクトメンバー（奈良、鈴木、稲村、石井）およびJICA中部・内藤氏が参加した。

同日のワークショップでは、以下の3つを主なアジェンダとし、奈良、バートルガ、バトエルデネがファシリテーターとなり進行した。

- ①先のワークショップ（5月16日開催）での課題に、その後どのように取り組んだかの報告（モンゴル側から）
- ②市民の主体性をより高めるための要点および日本の先行事例の紹介（日本側から）
- ③総合ディスカッション

上記のうち①についてはバトエルデネが代表して報告を行った。5月16日のワークショップの結果を受けて、この夏（2022年6月～8月の3ヶ月間）のホブド市での取り組みのスローガンを「リスクの小さい夏へ：みんなで子ども達を守ろう」に決めたことがまず報告された。このスローガンのもと、やはり5月16日の議論内容をふまえ、ホブドの子ども達の生活リスクを整理し、提案された対策をアクションプランとして構造化し、「リスクの小さい夏へ」の実行委員会を立ち上げ、可能な項目には予算をつけて実施につなげたことも報告された。例えば、学校に出前授業に出向き、洪水のビデオを視聴してもらったうえで子ども達にどう感じたか、どうすればよいかを話し合ってもらい、感想文を書いてもらうという学習会を開催した。また、6月1日の「子どもの日」という機会をとらえて、同日に防災イベントを開催したとの報告もなされた。このイベントでは子ども達自身に描いてもらったポスター（「お父さん、お母さん、わたしたちを置いて出かけないで」）などを掲示された。その様子はSNSやコミュニティTVでも発信・放送されたとのことである。さらに今後は、ボヤント川に洪水注意の看板の設置や、防災活動を可視化するためのユニフォームの作成も検討したいとの考えが示された。

②については奈良から、市民が防災に受け身であることは世界共通の悩みであり、日本でも同様であるが、防災を「自分ごと」としてとらえる地道な取り組みは着実に効果をあげていることを述べた。さらにその先進的事例として、東京都なぎさニュータウンでの「なぎさ防災会」を主軸とした住民主体の防災活動について具体的に紹介した。また、公務員の意識やリテラシー向上は重要であることから、日本では内閣府が公務員を対象とした「防災スペシャリスト養成研修」を行っていることにも触れた。

上記の①②をふまえ、③の総合ディスカッションでは、モンゴル側から活発な意見出しと今後に向けた課題設定が行われた。例えば以下の通りである。公務員は住民同様に防災を推進する重要な主体であり、今後はホブド市の公務員も参画しての取り組みに展開していきたいこと。各バグでのボランティアリーダーの選定を急ぎ、活動に加わってもらうこと。ホブド市にも集合住宅があり、なぎさ防災会に相当する防災委員会のような組織を立ち上げたいこと。住民の意識を把握し、彼らのニーズにあった施策を打つ必要性があること、総じてホブド市での安全・安心なまちづくり・くらしを実現したく、引き続き日本との交流を継続したいこと。

ワークショップのまとめとして、自然災害を含めた生活リスクを低減するためにこれからも両国の関係を強めることを確認したうえで、次回は一般住民や公務員などさらに多様な主体を集めてのワークショップを現地で開催するとの課題を共有した。

4-4 ホブド市での対面によるワークショップ（2022年9月6日開催）

COVID-19パンデミックで長く制限されていたホブドへの移動がようやく許可されたことを待ち、実に3年ぶりに対面による市民ワークショップがホブド市現地で開催された。同日のワークショップの詳細は以下の通りである。

- ①開催日時：2022年9月6日（火）14：00～17：00
- ②場所：ジャルガラント・ソム（ホブド市）庁 3階 会議室
- ③主催：JICAモンゴル事務所
- ④共催：ホブドNEMA、JICA草の根チーム、ジャルガラント・ソム
- ⑤協力：放送大学、モンゴル国立大学、名古屋大学
- ⑥テーマ：「みんなで高めよう、わがまちの安全・安心—モンゴルと日本の交流50周年記念・ホブド防災ワークショップ2022—」
- ⑦総合司会：奈良、バートルガ、バトエルデネ
- ⑧参加者：全体でおおよそ100名（バグ長、ソーシャルワーカー、防災ボランティアリーダー、一般市民、公務員、議会関係者、学校関係者、防災専門家、JICA、NEMA、草の根プロジェクトチームメンバー）

⑨目的：JICA草の根プロジェクト全体とジャルガラント・ソム（ホブド市）の活動の「これまで」を概観し、ホブドの多様な主体とプロジェクトメンバー（モンゴルと日本）とが協働して様々な防災活動を行ってきたことを振り返る。同時に、ホブドでの災害リスク対応が喫緊の課題であることを専門家の助言も得ながら改めて認識し、これまでの防災活動をふまえさらにどのような協働が可能か、「これから」を共考する。

⑩プログラム

- 14：00～14：10 開会挨拶（JICA、NEMA、ホブド県、ホブド市）および趣旨説明（奈良）10分
- 14：10～14：35 「自助・共助・公助」：日本の取組をホブドへ（奈良）25分
- 14：35～14：50 ホブド県の災害ハザードを知る（ナランゲレル）15分
- 14：50～15：00 ホブドの観測結果からのコメント（ホブド気象観測所長エンフザヤ氏、ホブド大学オドゴンバヤル氏、ホブド地震観測所長ザグダスレン氏）：各3分
- 15：00～15：15 映像コンテンツで災害を学ぼう（稲村）15分
- 15：15～15：40 休憩・コーヒープレイク 25分
- 15：40～16：10 ジャルガラント・ソムの取組（バトエルデネ）30分
- 16：10～16：35 ディスカッション：「安全・安心な地域づくり」（司会：バトエルデネ）25分
- 16：35～16：40 主催者からのコメント（JICA 吉村次長）5分
- 16：40～16：45 閉会の挨拶（鈴木）5分

ワークショップ全体を通じて、JICA草の根プロジェクトとホブド市で行われてきた活動はみな自分たちのまちの安全・安心を高めるための多様な主体の協働による取り組みであったこと、着実に続けられ成果をあげてきたこと、わたしたちには何かを成し遂げる力があること、防災というかたちで日本とモンゴルの交流が行われてきていること、などを確認した。

ディスカッションでは、学校のソーシャルワーカーや一般住民を含めた多様な立場から活発に発言があった。「学校に防災活動部があり、子どもは意識を高めている」「子どもが防災を学ぶことで親も本気になった」「子どもを動かせば親も動く」など、子どもへのアプローチを通じて大人を含めた地域全体に防災活動を波及させていくことの有効性が確認された。また、「ハザードマップはリスク対策をするうえでのエビデンスとなる。科学を政策につなげることが重要だ」「計画は重要だが、予算をつけることも重要だ」といった政策に関わる意見も出された。日本とモンゴルの交流についての意見も多く出され、モンゴル側からは「草の根プロジェクトチームに感謝している」

「COVID-19パンデミックで長く会えなかったがようやく会えた。会うたびに嬉しい」「ひとつのタスクを遂行したら、つぎの課題が設定されていく。そしてそれをまた遂行していく都度、達成感でいっぱいになる」との声が寄せられた。

ホブド市長からの「わたしたちのリスクを減らすために尽力してくれることに感謝している。完成品やハードをもらうよりも、手法ややり方を伝えてくれるほうが、わたしたちにとっては必要なことだ。」との感想は、われわれJICA草の根プロジェクトの理念をよく理解したうえでのものである。日本側からは「モンゴルのみなさんの考えかたや活動からわたしたちも多くを学んでいる、感謝している」と御礼を述べた。

3回目のワークショップについては参加者アンケートをとった。その結果については、次章にまとめる。

5 映像コンテンツ

5-1 映像コンテンツ制作の考え方と実践

防災啓発プロジェクトにとって映像コンテンツも重要な構成要素の一つである。筆者らは、1) できるだけ正確な災害・防災に関する学術的知見とともに、2) モンゴル遊牧社会で培われてきたレジリエントな知を重視している。映像に関しては、まず1) に関わるものの制作を先行してきた。そして、プロジェクトの過程で2) について調査し、その映像化・可視化を行うことも目指してきた。さらに、3) 筆者らと地域住民との間で実践してきた活動自体を記録に残すことも重要だと考えてきた。

1) に関しては、グローバルな知見、モンゴルに関わる知見、そしてホブドという地域に特有の知見を組み合わせることを重視した。パンデミックの影響で、当初の計画を縮小せざるを得なくなったが、そのような観点からいくつかのコンテンツを制作した。以下はその一例である。

- ①バトジャルガル（モンゴル環境省大臣）「最近の気象災害・洪水災害の特徴」
- ②セルジミヤダグ（非常事態庁）の講師「地震災害」
- ③アリウナ（非常事態庁）「ゾド（干ばつ、冷害）」
- ④サラントヤ（気象学研究所ホブド支所長）「ホブドにおける気象災害の特徴」

①は、グローバルな地球温暖化について概説し、モンゴルにおける気象災害、洪水災害の可能性、さらに地球温暖化の影響で起こりえる災害はどのようなものかを論じたもの。②は、途上地域（ハイチ、チリ、中国四川省など）の地震災害の事例をとりあげ、モンゴルにおける急激な都市化に伴うリスクと対策について述べたもの。③は、統計と事例をとりあげ、モンゴル遊牧民にとって最も関心の高い「ゾド」の原因や対策

について論じたもの。④は、ホブドの地形・環境の複雑な特徴を示し、地球温暖化の影響による気象災害の特徴や対策について述べたものである。

これらは、全体としては、先に述べたようなグローバルな観点からローカルな知見までを統合した形になっている。モンゴルの地域社会の住民にとって、こうした災害の背景と対策に関する科学的知見をまとめた形で知る機会は多くはない。その意味で、これらのコンテンツは、意義深いものと言えるだろう。

先に述べた2)と3)については、中期的な観点から継続していく必要があるが、それらはJICA草の根プロジェクトとともに、それと連携した科研・挑戦的(開拓)の一環として、実践的研究の形で進めていきたい。制作されるコンテンツは、非常事態庁と地域社会、またモンゴル国立大学のリモート教育のコンテンツとして活用できるものと想定される。

5-2 映像コンテンツの評価と活用

映像コンテンツについて、行政や住民の意見を聞くため、2022年9月にホブドで開催したワークショップで、映像コンテンツの一部を映写し、「映像コンテンツについての意見」および「その活用について」のアンケートを実施した。

ワークショップの参加者は百数十名であったが、アンケートの回収は62票であった。男性が16名、女性が45名、未記入1名、年齢は、21歳から65歳(平均42歳程度)であった。職業は、非常事態庁職員7名、公務員(ソム職員を含む)5名、バグ(市の地区)長9名、ソーシャルワーカー11名、教員5名、ボランティア5名、気象局専門家1名、一般住民7名、無記入(一般住民を含む)12名であった。

映像コンテンツに関しては、自由回答を求め、良い悪いの評価を求めなかったが、「良い」「面白い」「わかりやすい」などの好評価に相当する回答は24ほどであった。一方で、様々な意見や要望があった。その一部を紹介すると、「より広い知見」を求めるものが4票程度、(より具体的な)「防災対策・防災教育」の内容を求めるものが7票程度、「遊牧民の伝統知や住民の考え方」を取り入れるべきといった意見が6票程度、コンテンツに「子どもの参加」を求めるものも2票程度あった。

コンテンツの活用に関する意見としては、「職場、学校、住民、児童に防災セミナー等で見せる」というものが10票以上あり、最も多かった。具体的には、「職場でセミナーなどを行う、その後住民へのセミナーを行った方がいいと思います。」「田舎に暮らしている人たちをもっと教育してほしいです。」「学校の生徒たち、公務員たちにもっと広報してほしいです。講義、セミナーなどを行ってほしいです。」「小さい子ども達に定期的に防災教育に関する授業とか何か行ってほしいです。」「住民たちに直接いろいろ教えてください。ジャルガラント・ソムだけではなく田舎のバグ長たちと協力することが大事だと思います。」「地震、乾

燥化などについて住民たちに知らせることと住民たちと協力することが重要だともいます。」「地震測量所が地震に関する情報を住民に教えることが重要だと思います。」「地元のテレビチャンネルで定期的に放送すること、地元のソーシャルネットワークにのせること、学校の教材として使うこともできるようなコンテンツがいいと思います。」など、ニーズの高さがうかがえた。テレビやソーシャルネットワークで流してほしいという意見、紙のパンフレットも欲しいという意見も、それぞれ数票あった。「ゴミ問題」「植林、湖などを守る環境問題」に関わる意見もあった。

「日本の良い経験をホブドで生かして防災活動をしたいです。オンラインで講座、講義、ワークショップ、セミナーなどを、公務員を対象者として行うことが必要だと思います。」(バグ長)、「地方に住んでいる個人は自分と周りの人を助ける知識を持っているべきだと思います。これは私たちの義務だと思います。今日はいろいろなことが分かりました。皆さんのこれからの活動にご成功を祈ります。ありがとうございます。」(ボランティア)など、プロジェクト全体への評価や、自主的な活動への意気込みなどについての記述もあった。

いずれも貴重な意見であり、今後の制作に活かしていきたいが、筆者らのできることには限界があるため、こうした意見を非常事態庁やモンゴル国立大学に引き継いでいきたいと思う。」(ボランティア)といった意見もあり、筆者一同、勇気づけられた。

6 おわりに：今後の展開

2022年は日本とモンゴルの外交関係樹立50周年にあたった。パンデミックのため、プロジェクトは2年半にわたって現地訪問を中断しなければならなかったが、何とか渡航を再開でき、この記念すべき年に、これまでのプロジェクト実践の成果をいったん集大成する形で、防災啓発事業の現地開催が叶ったことは、筆者らにとって大きな喜びとなった。

6-1 ワークショップ・市民主体の防災活動の自立に向けた展開

ワークショップにより、「防災」「安全・安心なまちづくり」をテーマにしながら互いの信頼をさらに進化させることができた。その観点からも(オンラインと現地対面の)3回のワークショップ開催は意義深いものとなった。3回目の現地ワークショップのあと、今後はホブド市(各バグ)で正式にボランティアリーダーを選定し、ホブド防災リーダーチームを組織する(市長名で指示書を出してもらう)こと、防災活動を可視化するためにもホブド防災リーダーチームが着用するためのユニフォームを作成すること(独自のロゴをつける)、今年度中を目途にホブド防災リーダーチームが参加しての市民ワークショップを開催することも決まり、今後のさらなる展開が期待される。

6-2 防災カルタの今後の展開

9月のカルタ大会の成功はモンゴル国内でも大きな反響を生んだ。テレビ報道、インターネットによる広報のほか、JICAモンゴル事務所による50周年記念事業としての広報活動によるものであった。大使館におけるレセプションなども情報提供の場となったようである。

モンゴル教育省は防災カルタを安全教育のための教材として全国展開することを検討開始した。きっかけは吉村副所長が教育省の政務次官に紹介したことによる。その後、教育省の担当者レベルでの相談が9月12日に行われ、武田氏のほか鈴木、石井、バートルガが参加した。

一方、前述のように(3-4参照)、モンゴル非常事態庁でも、防災カルタの全国展開の推進について、鈴木と石井が会合をもった。そこでは、教育省が学校教育への反映を検討していることの重要性を確認した。しかし最適な教材を整備するためにも、完成品を単に配るだけでなく、①参加型を確保すること、②地域に特性に沿ったカルタを作成・供給すべきこと、③カルタの意義と活用法を指導すること、の三点が必要である。そのためまずは非常事態庁と教育省との調整が必要であり、カルタ整備は引き続き非常事態庁が主導することが求められる。

以上の議論を経て、今後の進め方として以下が合意された。

- 1) ウランバートル版の防災カルタを作る。ホブド版のカードの大半は使えるが、一部をウランバートル版に置き換える。
- 2) 「参加型」とするため、ウランバートルの学校の生徒(10歳から15歳)に絵と詩の作成を促し、コンテストで優秀賞を選ぶ。
- 3) 石井とナラマンダハがクオリティを高め、来年度前半の完成を目指す。
- 4) 以上の進行は非常事態庁の検討チームが中心となって進め、日本側がサポートする。
- 5) ウランバートル市教育委員会との連携を進める。
- 6) ウランバートル版の完成の後、ホブドでの普及状況とも合わせて防災効果の評価を十分行う。
- 7) 評価結果を受けて、モンゴル北部、南部、東部版もそれぞれ整備できるように検討を行う。
- 8) 全国展開のためには現在進めている草の根技術協力事業の後継が必要となるため、日本・モンゴル双方でその実現の可能性を模索する。

アリウンボヤン長官はこの会合の最後に、カルタ作成を中心的に進めてきた石井に対して、以下の言葉を贈った(以下は通訳を務めたアリウナ氏の記録である)。この会合の様子は、NEMAのwebsite (<https://nema.gov.mn/n/133669>)でも紹介された。

Ishii-san made an excellent job for the development of the carta as she didn't just copy Japanese Bosai

carta. She localized the carta by considering Mongolia's disaster profile, geographic features, climate and people. Also, it's great job of engaging children through drawings and poems which children's ideas were reflected on the carta.

防災啓発プロジェクトの活動は、筆者らの初期の目的を大きく超え、モンゴルに新たな文化を移植することができつつあることを実感することができた。モンゴルと日本の大学間の共同を軸とするJICA草の根協力事業が、モンゴルの異なる省庁の連携を主導し、大きな成果をあげつつあるとすることができるだろう。

6-3 プロジェクトに対する評価と意見

防災啓発プロジェクトが終盤に入った(当初予定では2022年9月に終了だが、一年半をめぐりに延長が認められた)ため、ワークショップの機に、アンケートで、プロジェクトの活動に対する評価をしていただき、自由回答のコメントを求めた。アンケート回答者の属性は、4-2で述べた通りである。

61票(評価記載なしの1票を除く)中、「とても良い」が28票(41.1%)、「良い」が30票(44.4%)、「悪い」が2票(3.2%)、「とても悪い」が1票(1.6%)であった。

「住民に対するこんないい活動をしている皆さんに感謝しています。今日のワークショップでとても重要なことを学びました。プロジェクトの結果についてまたこのようなワークショップを作ってほしいです。」「両国の友好関係がここまで良くなってうれしいです。皆様のお仕事にご成功を祈ります。」「このプロジェクトのおかげで防災知識を自分が学ぶことと自分が学んだことを他の人に教えることも大事だと思います。」「まずモンゴルと日本の友好関係50周年おめでとうございます。防災教育のことでホブド県は日本国と協力してプロジェクトを実施していることは心から嬉しいです。これからもこのプロジェクトはとても効果的に続いていくと期待しています。ありがとうございます。」「といった好意的な評価をいただくと共に、「ジャルグラント・ソムの洪水対策をちゃんとしてほしいです。」「ハザードマップを作り、ハザードマップを使用した対策、活動などを行ってほしいです。」「田舎の住民たち、バグ長、ソム長たちと協力していろいろな活動をすればもっと効果的だと思います。高山地帯の温暖化による土壌変動、土壌移動などによって住民たちは被害を受けているのでこの現状について調査してほしいです。」といった具体的な要望もあった。

ハザードマップについては進行中であるが、「調査をして災害に関する予防知識となることをたくさん教えてほしいです。」「これからはずっと協力してください。セミナー、講義などを行ってほしいです。」といった要望に対しては、住民自らによる主体的活動の推進のための地固めがさらに重要だという認識をあらたにしたところである。

謝辞

本稿は、JICA草の根技術協力事業（パートナー型）「モンゴル・ホブド県における地球環境変動に伴う大規模自然災害への防災啓発プロジェクト」（2017年10月～2024年3月、代表鈴木康弘）による実践活動の成果の一部である。また、科学研究費・挑戦的研究（開拓）「遊牧・山岳・先住民地域におけるリモート教育のモデル構築に関する実践的研究」（課題番号21K18122、2021～2026年度、代表稲村哲也）の研究成果の一部である。本事業の遂行にはモンゴルにおける多くの方々の協力を得ている。個々のお名前を記述することはできないが、衷心より謝意を表したい。

参考文献

- 石井祥子、鈴木康弘、稲村哲也2015『都市と草原—変わりゆくモンゴル』風媒社
- 石井祥子、奈良由美子、稲村哲也、高橋博文、スヘー・バートルガ、鈴木康弘2019「モンゴル西部の地方都市と遊牧社会における暮らしと自然災害—ホブド県における現地調査報告」『放送大学研究年報』36：93-111
- 石井祥子、稲村哲也、鈴木康弘、ダンガー・エンフタイワン、奈良由美子、高橋博文、スヘー・バートルガ、ビャンバジャブ・ナラマンダハ、ケレイド・ハスエリドン2020「モンゴル、ホブド県における遊牧民の災害の記憶・認識と『防災啓発』」『放送大学研究年報』37：93-108
- 石井祥子、奈良由美子、稲村哲也、鈴木康弘、高橋博文、スヘー・バートルガ、ビャンバジャブ・ナラマンダハ、ダンガー・エンフタイワン、オイドブ・スフバートル、ケレイド・ハスエリドン2021「モンゴルにおけるレジリエンス強化のための防災啓発とリモート教育」『放送大学研究年報』38：1-19
- 稲村哲也2014『遊牧・移牧・定牧—モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版
- 稲村哲也、スヘー・バートルガ、石井祥子、石黒聡士、鈴木康弘2017「モンゴルにおけるレジリエンスに関する学際共同研究—地震被害・活断層調査」『放送大学研究年報』34：39-52
- 稲村哲也、鈴木康弘、石井祥子、スヘー・バートルガ、奈良由美子、河合明宣、山田恒夫、高橋博文2018「モンゴルにおけるレジリエンスの研究と実践—JICA草の根技術協力事業（パートナー型）の開始」『放送大学研究年報』35：61-76
- 奈良由美子、稲村哲也（編）2018『レジリエンスの諸相—人類史的視点からの挑戦』放送大学教育振興会
- 奈良由美子、スヘー・バートルガ、稲村哲也、鈴木康弘、石井祥子、高橋博文、高市善幸、長谷川智則、ビャンバジャブ・ナラマンダハ2020「モンゴル西部ホブド市における地形学的ハザード分析と住民参加型の地域防災活動に関する実践的研究」『放送大学研究年報』37：83-92

- 奈良由美子、スヘー・バートルガ2020「モンゴル・ホブド市における住民参画型防災のしくみ作りに向けたアクションリサーチ」『危険と管理』51：173-193
- バートルガ2003「モンゴルのマイノリティ「カザフ」社会の現状と変化—モンゴルの市場経済化とカザフスタンへの移住—」『愛知県立大学国際文化研究科論集』4：109-131
- バートルガ2004「社会変動と移民社会の現状—カザフスタンにおけるモンゴル系カザフを中心に」『愛知県立大学国際文化研究科論集』5：111-126
- バートルガ2008「モンゴルのマイノリティにおける伝統復活とエスニシティ変動—西部地域とモンゴル系エスニック集団をめぐって—」『共生の文化研究』（愛知県立大学多文化共生研究所）1：112-125
- Ariunaa, C., Uljin, U., Shinoda, M., and Suzuki, Y., 2022 Social Causes of Dzuds in Mongolia Since the 1990s., *Journal of Disaster Research*, in press.
- Ariunaa, C., Shinoda, M., Suzuki, Y., and Komiyama, and H., 2020 Mitigation of severe wintertime disasters in northern Mongolia through the early implementation of local action, *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 50, Article No. 101739.
- Nara, Y., Battulga, S. 2019a Observations on Residents' Risk Awareness and Practice of Countermeasures against Natural Disasters in Mongolia : Questionnaire Survey Data of Khovd Citizens. *Procedia Computer Science, Science Direct* 159 : 2345-2354, Elsevier
- Nara, Y., Battulga, S. 2019b Practical Research and Education to Enhance Disaster Resilience of Citizens : Lessons from Japan's Disasters and Collaboration with Mongolia, *Proceedings of the International Science Conference on Strengthening Urban Disaster Resilience*, pp. 51-61, Disaster Research Institute under National Emergency Management Agency, Mongolia, UN Office for Disaster Risk Reduction,
- Nara, Y. and Inamura, T. (eds.) 2020 *Resilience and Human History : Multidisciplinary Approaches and Challenges for a Sustainable Future*, Springer
- Suzuki, Y., Nakata, T., Watanabe, M., Battulga, S., Enkhtaivan, D., Demberel, S., Odonbaatar, C., Bayasgalan, A., and Badral, T., 2020 Discovery of Ulaanbaatar Fault : A New Earthquake Threat to the Capital of Mongolia. *Seismological Research Letters* 92, 437-447.
- Suzuki, Y., Ishii, S., Inamura, T., Nara, Y., Takahashi H., Battulga, S., Enkhtaivan, D., Nagrangereel S., Ariunaa, C., Serjmyadag, D., Altanbadral, B., and Bandal, T. 2019 Enhancing Citizens' Disaster Resilience through an International Transdisciplinary Research Project in Mongolia. *Geographical review of Japan series B*, 92, 1-9.

(2022年10月31日受理)

	<p>Зайлшгүй шаардлага гараад Зах, дэлгүүр, эмнэлэг явахаар бол Зай барих дүрмийг Заавал баримтлаарай хүүхдүүдээ.</p> <p>市場やスーパーや病院へ行ったら、周りの人と距離をとるというルールをきちんと守りなさい、子供たちよ。</p>
	<p>Савгай уснаасаа шанагадаж ууж болохгүй. Сайхан ундаагаа дамжуулж ууж болохгүй. Өвчний вирус, нян, бактери гээд Өчнөөн муухай зүйл халдварлана шүү.</p> <p>樽の水を同じひしゃくで飲んではいけません。ジュースの回し飲みもダメ。病気の菌、バクテリア、ウイルスなどに感染するよ。</p>

卷末写真1 新たに追加されたコロナ関連の札の一部



卷末写真2 9月5日ホブド・カルタ大会の様子。100人以上の生徒が集まった。